



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

食糧難、艦砲射撃、兵器の切れ端が遊びの材料に

魚が好き。なのに配給は鮮度が悪かった

江畑町で終戦を迎えた女性に戦争の頃のお話を初めて聞いたのは、2020(令和2)年のこと。たまたま別件の用事でお宅を訪ねた時のことだった。ご本人の希望でお名前はふせるが、仮にIさんと呼ぶ。2026(令和8)年3月現在で90歳になる。あらためて太平洋戦争前後の体験を話していただいた。

終戦時は10歳で、生家は農家だった。

魚が好きだったが当時は配給。これにまつわる苦い思い出がある。食べた後、皮膚に赤い発疹が浮かび、広がった。ジンマシンだった。「配給の魚はみんな痛んでいた」という。

当時は治療を受けることもできなく、皮膚が赤くむくれた。「生ナスを食べると直る」。そんな俗説(※1)があったらしい。口にすると苦くて食べられたものではない。無理して食べて気分が悪くなったという。

症状は数日でおさまったが、しばらくの間は、ナスも、魚も苦手になったという。もっとも、今は美味しくいただいている。

時に父親が、自転車につないだリヤカーに米や柿など様々な収穫物を乗せ、茨城県平潟の漁村に運んで行った。いわゆる闇取引(※2)だが、受け取った方は大いに喜び、山ほど魚を分けてくれた。

江畑と平潟は10数km。現代なら車を使って数十分で移動できる距離だ。しかしリヤカーをつないだ自転車だ。当時のリヤカーは最小で、幅75cm、長さ120cm程度があったらしい。荷物満載で、このサイズのリヤカーを自転車でひいた。大変な労力だったろう。

リヤカーには、カマス(※3)に詰め込んだ数の子やタラなどの乾物、大きなアンコウなどが積みこまれていた。鮮度の良い魚が手に入った時はとてもうれしかったと話す。

ただ、手に入れた魚などはあくまで闇の取り引き。隣近所に知られるわけにはいかない。夜にこっそり料理していた。

「今も丈夫でいられるのは、この時の親のおかげかな」。そう話す



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

ビビン、バババン

「ビビン、バババン」

しゅうせん とし あめ ふ ひ しんや おお おと ひび ひたちし おそ れんごう
終戦の年、雨が降るある日の深夜に、どこからともなく大きな音が響いてきた。日立市などを襲った連合
こくぐん かんぽうしゃげき きろく がつ にち にち じっこう
国軍による艦砲射撃によるものだった。記録によれば7月17日から18日にかけて実行された。

よる うえだまちほうめん ひと えばた ひなん
その夜、植田町方面からたくさんの人が江畑に避難してきた。

とうじ げんざい じえいあーるじょうばんせんうえだえき はいご はちまんだい あた よこあな ぼうくうごう
当時、現在の J R 常磐線植田駅の背後にある「八幡台やまたまや」の辺りに、横穴の防空壕があったと
いう。植田から江畑の I さん宅に避難してきた知人は、裸足で泥だらけだった。まず防空壕に避難したのだ
が、押し寄せた人ですし詰め状態、水たまりもあった。もし倒れる人がいたら大けがをしかねないとも考えた
ようだ。

あい たく はたけ てつだ きかんへい せんじょう ふしょう げんいん うて ま ひと ひと
I さん宅の畑を手伝っていた帰還兵がいた。戦場での負傷が原因で腕を曲げられない人だった。この人
はおお おと つぎ はな
は大きな音について次のように話していた。

「(音は)日立への艦砲射撃に違いない。こらだって危ない」。

しら とうじ ぐんかん しゅほう とうたつきより さいだい じゃく ひたちおき うえだ ちよくせん
調べると、当時の軍艦の主砲は到達距離が最大40km弱あった。日立沖から植田まで直線でおおよそ
40km なので、艦隊が植田に向けて主砲を撃てば届く可能性がある。また、錦町には化学工場もあった。
ひょうてき かんが くろう
標的になりうる。そう考えると、あながちとりこし苦労ともいえない。

ちじん ひと にんほど おも いえ なか ひと
知人には、たくさんの人がついてきた。100人程もいたように思えたという。家の中は人でいっぱいだった。

しょうこ せけん ひろ い つた かんが
※1 たしかな証拠がないにもかかわらず、世間に広く言い伝えられているうわさや 考 え。

さだ ほうりつ ばいばい ねだん と ひ
※2 定められた法律やルールではなく、ひそかに売買したり、おおよけではない値段で取り引きすること。

あ ふた お りょうわき ふくろじょう い もの
※3 わらで編んだむしろを2つ折りにして両脇をとじた袋状の入れ物。



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

ちち むね だ かな きたく 父の胸に抱かれた悲しい帰宅

とうじ アイ きんりん ひたち こうじょう はたら い じよせい おお じよしていしんたい
当時、Iさんの近隣からも日立の工場に働きに行っていた女性が多かった。女子挺身隊(※4)だったの
こういん さだ ひ ひたち はたら い きんじよ むすめ かえ き
か、工員だったのかは定かではないが、ある日、日立に働きに行っていた近所の娘さんが帰ってきたと聞いた。
アイ かあ いどばた た もど むすめ むか て なみだ
Iさんのお母さんは井戸端に立ち、戻ってきた娘さんを迎えながら、かぶった手ぬぐいで涙をぬぐって
かえ いこつ ちちおや むね だ かんぼうしゃげき ぎせい
いた。帰ってきたのは遺骨だった。父親の胸に抱かれていた。艦砲射撃の犠牲になっていたのだ。

せんご しょくりょうなん つづ ひ こめ みそ かか ひたちたが す しんせき たず
戦後、食糧難が続いた。そんなある日、米や味噌を抱えて常陸多賀に住んでいた親戚を訪ねたことがあ
た。

たず しんせき えき ぶん うみ む ある す ひたちたが い とちゅう きしゃ
訪ねた親戚は、駅から30分ほど海に向かって歩いたところに住んでいた。常陸多賀に行く途中の汽車の
なか み やま うえ あか や み かんぼうしゃげき めいちゅう や
中から見えた山の上に、赤く焼けただれたタンクのようなものが見えていた。艦砲射撃が命中し焼けただれ
こうじょう あと
た工場の跡だったらしい。

しんせき たず とき み かいがんちか りっぱ りよかん
「親戚を訪ねた時に見た海岸近くの立派な旅館はそっくりしていた(※5)のにね」

おな かんぼうしゃげきか ほうだん み けしき か せんそう つく だ
同じく艦砲射撃下にありながら、砲弾があたる、あたらないで、見える景色が変わる。戦争が作り出した
けしき おさな こころ つよ いんしょう や つ
景色は、幼い心に強く印象を焼き付けていたようだった。

や ね おおあな 屋根にあいた大穴

じかん せんちゅう もど
時間を戦中に戻す。

アイ そら よこぎ ばくげきき み うえだえき れんごうこくぐん かんさいき きじゅうそうしゃ き
Iさんは空を横切る爆撃機を見たという。植田駅が連合軍の艦載機から機銃掃射されたことも聞いた。

きじゅうそうしゃ おな ひ どう か ばくだん にしまち しょうゆ しょうぞうもと や ね つ やぶ ふはつだん ばくはつ
機銃掃射と同じ日、投下された爆弾が錦町の醤油の醸造元の屋根を突き破った。不発弾で爆発はしな
とうじ あい ほどはな じたく ばくだん お おと おお ひび ゆ
かった。当時、Iさんは3km程離れた自宅にいた。爆弾が落ちた音のはそこまで大きく響いてきた。揺れをと
じひび おと
もなう地響きのような音だったという。

のち かあ さめかわばし げんば み や ね おお あな あ ひがい ようす
後に、お母さんといっしょに鮫川橋から現場を見た。「屋根に大きな穴が開いていてね」。被害の様子をそう
はな
話した。



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

ふうせんばくだん き はし あそ 風船爆弾の切れ端で遊んだ

なこそまちせきた ほうきゅうだい ふうせんばくだん う あ ようす もくげき
勿来町関田に放球台があった風船爆弾(※6)が、浮かび上がっていく様子も目撃していたという。

せきたほうめん やま ほう しょうしょう ふうせんばくだん ちい み ちか おお ふうせん
関田方面の山の方から上昇する風船爆弾は小さく見える。近づくにつれてだんだん大きくなり、風船に
ぶら下がったものも良く見えるようになった。爆弾やおもりの砂袋などだ。そして遠ざかるにつれて再び小さく
なり、やがて見えなくなる。「風船爆弾が爆発することはないと聞いていた。この様子が面白くてね」。子どもが
そら う あ ふうせん よろこ かんかく
空に浮かび上がるゴム風船を喜ぶ感覚だったのだろう。

ちちおや とうじ くれはかがくこうぎょう げん じぎょうしょ しごと い ときどき
父親は、当時、呉羽化学工業(現、クレハいわき事業所)に仕事に行っていた。時々、ゴムのようものの
き はし も かえ じよせい くれはかがく ふうせんばくだん つく き はな
切れ端を持ち帰ることがあった。女性は、呉羽化学で風船爆弾を作っていると聞いたことがあると話す。
しら かいぐんしき び はぶたえ つか ふうせんばくだん つく き はし はぶたえ
調べると、海軍式のゴム引きの羽二重(※7)を使った風船爆弾を作っていた。切れ端はこの羽二重だった。

はぶたえ ひ は くち おお いき す こ くち なか まる ふく ともだち
羽二重から引き剥がしたゴムで口を覆い、息を吸い込む。すると口の中でゴムが丸く膨らむ。友達とその
ふく おお きそ あそ
膨らんだ大きさを競いあって遊んでいた。

とうじ こ あそ ほか くふう すぎ さんし か ときどき
当時の子どもたちの遊びには他にもいろいろな工夫があったようだ。杉のヤニ(杉脂)を噛んで時々つば
は だ さいご のこ が から
を吐き出していると、最後にチューインガムのようなものが残る。これがガム代わりになった。また、殻をとった
こむぎ おな さいご じょう のこ
小麦も同じようにしていると最後にガム状のものが残るという。

あそ たいけん き はし ふうせんばくだん ざいりょう いちぶ しちゅう だまわ
とはいえ、この遊びの体験から切れ端ではあるが、風船爆弾の材料の一部が市中に出回っていたことが
わ
分かる。

たいへいようせんそう こうき ふそく ろうどうりよく おも さい さい けっこん じよせい せんそう かか
※4 太平洋戦争の後期に、不足した労働力をまかなうため、主に14歳から25歳の結婚していない女性らを、戦争に関
こうじょう せいさん びょういん かんご しごと じゅうじ つく そしき
わる工場での生産や病院での看護の仕事などに従事させるために作られた組織。

もと かたち のこ かんぼうしゃげき ひがい
※5 元の形のままで残っていること。ここでは艦砲射撃の被害がなかったことをさす。

わし のり つく おお ふうせん ばくだん こうどけい れんどう すなぶくろ と つ へいき たか そら ねんちゅうにし
※6 和紙とコンニャク糊で作った大きな風船に、爆弾や高度計と連動した砂袋を取り付けた兵器。高い空を1年中西
ひがし ふ はや かぜ へんせいふう と ちよくせつこうげき つか
から東に吹いている早い風(偏西風)にのせて飛ばし、アメリカを直接攻撃するために使われた。

はぶたえ おりもの ぬの いっしゅ
※7 羽二重は織物の布の一種。



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

ふくいんへい こころ 復員兵(※8)の心

じょせい たいへいようせんそういぜん じゅうぐん たか かいきゅう おじ ききょう さい がっこう
女性には、太平洋戦争以前から従軍し、それなりの高い階級となっていた叔父がいた。帰郷した際、学校
おじ おとず こうちようせんせい むか
を叔父が訪れると校長先生がうやうやしく迎えていたという。

おじ せんち おく もじ かこう かこう ほどこ りっぱ
叔父は、戦地からアルバムを送ってよこしていた。文字がへこむ加工(エンボス加工)を施した立派な
そうてい ひら はだか て しぼ ひと しゃしん のち かんが しゃしん ふく しゅっぺいさき
装丁だった。開くと裸で手を縛られた人の写真など、後に考えれば「ひどい写真」も含まれていた。出兵先
しはいちいき ひと さつえい しゃしん にほんぐん つよ こじ かんが
の支配地域の人を撮影した写真で、日本軍の強さを誇示したアルバムだったと考えている。

とうじ りっぱ ひょうし み なか しゃしん おも お きょうふしん あ こわ
当時、アルバムの立派な表紙を見ると中の写真を思い起こして恐怖心がこみ上がってきた。しかし、怖い
もの み おも さき しゃしん み おも にほん つよ くに あいこくしん
物見たさの思いが先じた。写真を見ると、「ひどい」という思いではなく、「日本は強い国」と、愛国心のような
おも
な思いがわいてきたという。

とうじ きょういく はな
「当時の教育(※10)のためだったのだろうね」と話す。

おじ せんご ひ はいのう せ お せなか まる つか き ようす ふくいん
叔父は戦後のある日、背囊(リュックサック)1つを背負って、背中を丸め疲れ切った様子で復員してきた。
はいのう すみ しょうゆ こけいしょうゆ かたまり はい
背囊には、炭のような醤油(固形醤油)が1塊しか入っていなかった。

おじ だ い だ だ しゃしん ひ は しょぶん
叔父は、あるとき「アルバムを出せ」と言い出した。アルバムを出すと「ひどい写真」を引き剥がし処分
せんそうはんざい と おそ かんが
した。戦争犯罪(※11)を問われることを恐れたのではないかと考えているという。

ぐんたい にんむ と せんち かえ へいじん
※8 軍隊の任務を解かれ戦地から帰ってきた兵員のこと。

ひょうし ほん そとがわ そうじやく
※9 表紙など本の外側の装飾のこと。

せんぜん せんちゆう こくみん すず せんそう きょうりやく しむ ないよう きょういく
※10 戦前、戦中は、国民が進んで戦争に協力するよう仕向ける内容で教育がされていた。

こくさいほう さだ せんそう こくさいふんそう いはん じゅうだん いはんこうい
※11 国際法で定められた戦争(国際紛争)のルールに違反する重大な違反行為。



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

や 病んだ心

その後、叔父は金属類を販売する会社を創業した。女性は、「頭が良かったんだろうね。業績はどどん
の伸びた」と話す。

業績が上向いたきっかけは朝鮮戦争だった。戦争の勃発によって日本にも軍需物資（※12）などの
発注が激増した。いわゆる朝鮮特需だ。

ところが、特需も長くは続かない。やがて業績は落ち込みはじめた。そんな時に叔父は「また戦争が起きな
いかな」と話した。戦争から帰ってきた人たちが、お酒の飲み会をしながら、戦場での武勇伝——冷静に
考えれば野蛮な行いなのだが——その行いを自慢げに話しているのを聞いた。Iさんは「戦争に負け、
自分たちもひどい目にあったのにどうしてなのかな」と思ったと話す。

叔父は、やがて、目に見えて衰えはじめた。ささいな出来事にもこだわりを見せ、気に病むようになってい
った。

ある日、東京にいっしょに出かけた。

暑い日だった。帰りの列車の発車の待ち時間、アイスを買ってくるから待っていてと伝え、叔父の元を離れ
た。戻るまで多少時間がかかった。叔父のもとに戻ると、「（発車に）間にあった。良かった。良かった」と涙を
浮かべた。不安をつのらせていたようだ。以前の叔父からは想像もできない姿だった。

叔父の様子に違和感を持った頃、「死んだへびも、死んだカエルも、見たくない」と言っていた。戦場で
死んでいく人々を思い出していたのではないかと考えているという。

しばらくして叔父が亡くなったと聞いた。亡くなる前、何の前触れもなかった。

※12 軍隊の維持や戦争を進めるために必要な、武器や弾薬、燃料、食糧などのあらゆる物品。



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

疎開者の思い出

あ い え さいた かぞく そかい
Iさんの家には、最多で5家族が疎開(※13)していたという。それぞれ川崎、東京、日立、植田などから
そかい じぶん かぞく ふく かぞく す おもや ばな いんきよやしき な や かぞく
の疎開で、自分の家族を含めると6家族が住んでいた。母屋、離れ(隠居屋敷)、納屋があったが6家族が
どうきよ てぜま ひ おば はこ こ おへ や あい ちちおや
同居となると、さすがに手狭だった。ある日、叔母が運び込んだダンスを置いた部屋で、Iさんの父親は
へ や せま とき うんわる かげ おば おば わる かえ
「部屋が狭くなったな」となげいた。その時、運悪く、ダンスの陰に叔母がいた。叔母は「悪かったな」とやり返
したという。

せんご おば な や く ころ たいへん はなした ぜんじゆつ おば あい
戦後、叔母が「納屋で暮らしたあの頃は大変だった」と話した。前述の叔母ではないかもしれない。Iさ
なにい ひと ふ せま はん ようい たいへん おう
んは「何言ってんのおばさん。うちも人が増えて狭かったし、ご飯の用意だって大変だったんだよ」と応じた。
おば ころ せわ わら こた
叔母は「あの頃は、世話になってわかったね」と笑って答えた。

「ああいう時って、自分だけ苦労したって思っちゃうんだね」。Iさんは振り返った。

かわさき き ちち かぞく よ じよせい きりょう
さて、川崎から来ていたのは父のいとこの家族で、みよちゃんと呼ばれている女性もいっしょだった。器量
ひと や
よし(きれいな人)だが痩せこけていたという。

あい ははおや ふびん かん どうじ ふろ そとぶろ じゆうたく そと もう
Iさんの母親はみよちゃんを不憫(※14)に感じた。当時のお風呂は外風呂(住宅の外に設けられた
ふろ ははおや しま ゆ ひ さいご はい ふろ はい ふろ た くち
風呂)だった。母親は、終い湯(その日の最後に入る風呂)に入るみよちゃんのために、風呂の焚き口によくジ
な こ や た
ャガイモを投げ込んでいた。焼けたイモを食べてもらうためだ。

ちち せんご かわさき かえ い ときおりもど は かみ ま つく かみま
父のいとこは、戦後、川崎に帰って行った。時折戻ってきて、タバコの葉をきざんで紙に巻き、作った紙巻き
いっとかん つ こ も かえ いち う もど
タバコやウメなどを一斗缶(※14)に詰め込んで持ち帰り、ヤミ市(※15)で売っていた。戻って来的时候には
こうかん どう じょう さとう も
タバコと交換したザラメ糖(つぶ状の砂糖)をいっぱい持ってきたという。

しょくりょうひん しこうひん もの りゆうつう くに せいげん はいきゅうせい どうじ はいきゅういがい りゆうつう もの
食料品や嗜好品をはじめ物の流通を国が制限し配給制となっていた当時、配給以外で流通される物
ぶっし よ とりしま たいしょう きしゃ どうじ じょうききかんしゃ えき ていしゃ さい
はヤミ物資と呼ばれ、取締りの対象となった。汽車(当時は蒸気機関車)が駅で停車した際に、いっせい
とりしま おこな ぶっし み と あ とりしま たいしょう ちち
取締りが行われることがあり、ヤミ物資が見つかりと取り上げられた。タバコも取締りの対象だった。父のい
とりしま ぬ
ところは取締りをうまくぐり抜けていた。

ちち かわさき かえ なべ かま う おおだな ほうこう ほうこうさき げんざい なが
みよちゃんは、父のいとこは川崎に帰らず、鍋や釜を売る大店に奉公(※16)した。奉公先は現在の永
いせいけいげ か ちか ほうこうさき とき みせ かま のこ めしつぶ ぬぐ と た
井整形外科の近くにあった。奉公先では、ひもじい(※17)時、店の釜に残った飯粒を拭い取って食べるこ
もあったという。



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

しょくりょうじじょう よ
食糧事情が良くなってくると、みよちゃんも、ふくよかに、いっそうきれいになったという。

とき なべ のこ みそしる す すかた み
ある時、みよちゃんが鍋に残った味噌汁をガバツと捨てる姿を見た。

せんそう とき おも
戦争の時、あんなにひもじい思いをしていたのにどうして、

おも わ あ
そんな思いが沸き上がってきたという。

せんじちゅう くる とき もの たいせつ ゆた へいき もの す
「戦時中の苦しい時にはあんなに物を大切にしていたのに、豊かになってくると平気で物を捨ててしまう。

ひと か み
人が変わったように見えた」

くる とき おも とき うな ひと か つよ きおく のこ
苦しい時の思いも時とともに失われてしまう。人の変わりようは強く記憶に残った。

せんそう くうしゅう ひがい へ としぶ ひと ちいき ひと たても の ちほう ぶんさん
※13 戦争による空襲などの被害を減らすため、都市部などの人がたくさんいる地域から人や建物などを地方に分散させること。

き どく
※14 かわいそうなこと。気の毒なこと。

やみいち たいへいようせんそう あと ぶっしぶそく はいきゅうせいど わくがい ほうりつ ほん とりひ おこな いちば
※15 闇市。太平洋戦争の後の物資不足でとられた配給制度の枠外で法律に反して取引が行われた市場。

やとわれたいえ かじ かぎょう しごと とく
※16 雇われた家の家事や家業に仕事として取り組むこと。

なか じょうたい
※17 とてもお腹がすいている状態。



いわき市は昭和61年に
非核平和都市宣言を制定し、
令和7年に40周年を迎えました

た と こ むすめ 田んぼに飛び込んだやんちゃ娘

あい はなし せんちゆう せんご じだい たいけん つぎつぎ かた
Iさんが話をはじめると、戦中や戦後の時代の体験が次々と語られる。

こんなエピソードも話してくれた。

がっこう じたく むす みち ねもと うろ おお き うろ じぞう なに
学校と自宅を結ぶ道のわきに、根元に洞があいた大きな木があり、洞にはお地蔵さんか何かがかまつられていた。そこでは穴施行が行われた。穴施行は、キツネの害を防ぐ願いを込めて、あずき飯や油あげ、豆腐などをお供えする寒い季節の行事だ。

ひ く とお こわ いま ちが がいどう まっくら とき ははおや
ここを日が暮れてから通るのはとても怖かった。今とは違い街灯などはなく真っ暗だ。そんな時、母親が途中まで迎えにきて離れたところから名前を呼んでくれた。とてもうれしかったという。

ゆうぐ うろ き なに とり と た た お あい こうきしん
ある夕暮れ、洞のある木から何かの鳥が飛び立って田んぼに落ちていった。Iさんは、好奇心がまさって、田んぼに飛び込み鳥を捕まえた。もちろん泥だらけだ。母親はやんちゃなIさんをあきれて見ていた。Iさんは笑いながら話した。

かずおお とき
数多くのエピソードをうかがった。時もだいぶすぎたのでおいとますることにした。

さいご あい せんそう とき はなし わたし とし しゅうせん とき しょうがくせい ひと
最後にIさんは、「戦争の時の話をできるのも、私たちの歳(終戦の時は小学生)の人たちしかいなくなったのね」と、たくさんの戦争体験が記録もないまま消えてきたこと、そして、消えつつあることを残念がっていた。